三二体詩

上

村上哲見

監修　吉川幸次郎

新訂　中国古典選

三体詩 上

村上哲見

著者略歴
1930年大連市に生まる
京都大学文学部卒業
現在京都教育大学助教授
著書―「李煜」（岩波書店）

新訂　中国古典選　第16巻

三 体 詩　上　　定価 650 円

発　行　　昭和41年 8 月 1 日 第 1 刷
著　者　　村　上　哲　見
発行者　　朝日新聞社　足 田 輝 一
発行所　　東京 名古屋 大阪 北九州　朝 日 新 聞 社
印刷　凸版印刷　　製本　古川製本

© 村上哲見 1966　装幀　原　弘

解説

一、「三体詩」とは

通常「三体詩」（サンテイシまたはサンタイシ）と呼ばれているこの書物は南宋・周弼（しゅうひつ）の編、「唐詩三体家法」、「唐賢三体詩法」、「唐三体詩」などとも称するように、内容からいえば、唐詩を選録したもの、つまり唐詩の選集である。その点ではこの「古典選」に収めるもうひとつの書物、「唐詩選」と性格を一にするが、その選び方にはそれぞれ特色があって、重複する詩は極めて少ない。その違いについてはのちに述べる。

この書物は、唐詩の諸形式の中で、近体の中の七言絶句、七言律詩および五言律詩の三つの形に限って作品を収録しており、「三体」とはすなわち三つの詩型を意味すると考えられる（唐詩の形式は、大別して古体と近体に分れ、近体には上の三つのほかに五言排律、五言絶句などがある。この点について、詳しくは小川環樹博士の「唐詩概説」、岩波「中国詩人選集」別巻、などを参照されたい）。わが国で室町時代に通行した説の一つに、唐の四つの時期、初唐、盛唐、中唐、晩唐のいわゆる四唐の中、初唐を除く他の三つの時期の詩を収めるから「三体詩」というとするものがあるが、これはことさらにひねった解釈であろう。三つの時期の詩を指して三体と称

するのはなじめないし、この書物が時期によってではなく、形式によって巻を分けてあるところよりみても、「三体」は三つの形式と解するのが穏当である。なぜ三体に限ったかという点についてはのちに述べる。

次にこの書物の特色とするところは、「家法」、「詩法」などという名称が示すように、単に唐詩を選んで収めたというのではなく、それによって詩の「法」＝原理、規範をあらわそうとしている点である。そのために、全体を単に三つの形式に分けるだけでなく、それぞれの形式について、表現のスタイルによって作品を分類している。この分類は、おそらくこの書物以前には例のないもので、編者周弼の独創といってよいであろう。一般に中国では、詩文の選集というものは、ただ読むためではなく、作詩作文の手本としてという性格を備えているものだが、この書物はことにその点が強調され、わかりやすく示されているといえる。わたしたち現代の日本の読者は、必ずしも作詩の手本としてこの書物を読むのではないけれども、やはり唐詩の、更に広くは漢詩一般の表現スタイルを考える、もしくはそれを考えつつ唐詩を読むという場合に、この書物は便利な構成をもっている。

二、「三体詩」の内容

この書物には、一六七人の詩人の作品、四九四首を収める（この数字は増註三巻本によるものであり、二十巻本の系統は四八六首である—第六節参照。また作者の数もテクストにより一、二の出入がある）。作者の中、杜常と方沢の二人だけ（ともに録する詩は七絶一首）は宋代の人である疑いがあるが、他のすべては唐代の詩人である。この二人についての疑問は、それぞれの箇所（六ページおよび一二四ページ）で述べることにして、ここでは省略する。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

作品数を形式別にみると、七言絶句一七四首、七言律詩一一一首、五言律詩二〇九首（二十巻本では二〇一首）となっている。「唐詩選」が一二八人、四六五首であるのに比して、作者作品ともに若干多いが、甚だしい差はない。ところがこの両書の重複をみると、「三体詩」の作者一六七人の中、「唐詩選」にも詩を録されているのは五五人で三分の一に満たず、実際に重複している作品となると、四九四首の中の二九首、比率にして六パーセントほどでしかない。これは「唐詩選」が古詩や排律、五言絶句などを含むことを考慮に入れても非常に少ない（「唐詩選」を「三体」に限ると、七絶一六五、七律七三、五律六六、合計三〇五首であるが、二九首という数はこれに対しても一割に満たない）。「三体詩」と「唐詩選」とが、同じ唐詩を対象としながら、その選び方が非常に違ったものであることは、この数字を見ただけでも明らかであろう。

次に一六七人の作者を時期別にみると、通説に従って初・盛・中・晩という四つの時期に分けるとして（小川環樹博士の「唐詩概説」では、景雲元年、七一〇以後を盛唐、大暦元年、七六六以後を中唐、開成元年、八三六以後を晩唐とする）、二つの時期にまたがって活躍した詩人があったり、伝記の明らかでない人があったりして、簡単に各時期に分けることはできないが、概数を挙げるならば、初唐・盛唐をあわせてほぼ二〇人程度にすぎず、中唐・晩唐はほぼ等しく、おのおの六、七〇人前後を数える。なお王勃、杜審言、沈佺期、宋之問などは、通常初唐の詩人とされる人々で、「三体」を初唐を除く三つの時期というのは、厳密にいうと事実ではない。また大勢ということよりいえば、中唐と晩唐の詩人で大多数を占めてしまうが、この点にこの書物の特色があり、初唐・盛唐の詩を主とする「唐詩選」と甚だ異なる点である。個々の作者についてみても、「唐詩選」において最も多くの詩を録する杜甫およびこれにつぐ李白の詩を、この「三体詩」では一首も収めない。逆に「三体詩」に

最も多くの詩を録する杜牧の詩は「唐詩選」にはみえない。そのほか「三体詩」に比較的多くの詩を録する詩人たち、許渾、賈島、司空図、雍陶、李商隱、白居易なども、「唐詩選」には全然みえないか、もしくは一、二首を録されるにすぎない。ただ例外は王維と岑参、更につけ加えるならば劉長卿であって、この三人は双方にかなりな数の作品がみえる。

三、編者周弼および「三体詩」編集の意義について

この書物の編者、周弼は字を伯弱（あるいは伯弼）といい、汶陽すなわち今の山東省陽穀県の人と称するが、もとよりこれは先祖の原籍であって、南宋になって以後は杭州（浙江省）に家を移していたらしい。父の周文璞、字は晋仙、号方泉とともに詩をよくした。詩集として文璞には「方泉先生詩集」三巻、弼には「端平詩雋」四巻があり、ともにいま「南宋群賢小集」の中にみえる。周弼は生前みずから「端平集」十二巻を刊行したというが、それは伝わらない。周弼の伝記に関する資料は、「宋史」に伝がないばかりでなく、そのほかにも甚だ乏しいが、故鈴木虎雄博士の「三体詩の著者周弼」（「支那文学研究」所収）では、「端平詩雋」とくにその巻首に録する周弼の友人李龏の序、同じく周弼の友人である釈元肇の詩集「淮海挈音」（その序は周弼が書いている）などを手がかりとして、次のことを明らかにされている。

㈠、四十年間、各地の地方官を歴任した（李龏の序に「四十年間、呉楚江漢に宦游す」）。その間に江夏（湖北省武漢市）の令、江西漕使の幕僚になっている（元肇の「周伯弱帳管を送る」詩の注に「君　嘗て江夏の令、江西漕幕為り」）。

㈡、従って嘉定一七年（一二二四）に隠退したときは、六〇歳ぐらいにはなっていたであろう（周弼に「甲申歳、官を解きて故居に帰る云云」と題する詩がある。甲申歳は嘉定一七年）。

㈢、淳祐一二年（一二五二）から宝祐五年（一二五七）の間に世を去った（「淮海挐音」の周弼の序には淳祐壬子、一二年とあり、一方、宝祐丁巳、五年としるす李龏の「端平詩雋」の序には、「今九原を隔つ」とある）。したがって九〇歳前後の長寿を保ったことになる。

㈣、「三体詩」を著わしたのは、わが国の室町時代の伝承によれば（各種の「抄」にみえる）淳祐一〇年（一二五〇）のことである。そのもとづくところは明らかでないが、否定する材料もないので、しばらくこれに従うほかはないであろう。

周弼の経歴について、右以上のものを加えるのは現在のところ難かしい。

周弼の詩集「端平詩雋」を収める「南宋群賢小集」とは、南宋の末に陳起が、同時代の詩人一〇九人の詩集を叢書として刊行した「江湖詩集」の後身である。周弼の詩集が「江湖詩集」の中にあったこと、すなわち彼が当時を風靡した「江湖派」の詩人のひとりであったことは、この「三体詩」の性格を考える上に閑却できない事実である。

南宋の後半に至って、詩を享受する階層、つまり詩を読んだり作ったりする階層が著しく拡大する。すなわち官僚であり読書人である一部の高い教養をもつ階層のみならず、一般庶民、都市の商人や農村の地主といった階層までが文学活動に参加するようになる（「江湖詩集」を刊行した陳起も、本屋の主人でありながら詩をよくし、みずからの詩集「芸居乙稿」を「江湖詩集」に収める）。そしてそれにともない、北宋以来の理知を主とする宋

詩の風は一変し、平明な抒情を主とする唐詩、とくに中晩唐の詩を範とする風が生れる。その傾向は、十三世紀のはじめ、いわゆる「永嘉の四霊」（浙江省永嘉県の四人の詩人、趙師秀、字は霊秀、翁巻、字は霊舒、徐照、字は霊暉、徐璣、字は霊淵をいう）あたりから顕著となるが、それを更におしひろめたのが、「江湖詩集」に収められた詩人たち、いわゆる「江湖派」の人々である。この「江湖派」を生んだ南宋詩壇の一般的情況については、吉川幸次郎博士の「宋詩概説」（岩波「中国詩人選集二集」第一巻）を参照されたい。ところで、毛沢東の「文芸講話」にもいうように、普及と向上が並行しているのが、文学発展の理想的なすがたであろうけれども、実際には普及はしばしば内容の低俗化をもたらす。南宋末期の詩の普及も、必ずしも詩の繁栄を意味せず、文学史上むしろ低調な時期とされる。事実、詩人の数は多いが、傑出した大詩人として名を留める人を出していない。そこで周弼自身が詩人としてどうであるかといえば、「四庫全書総目提要三二」によれば「其の詩　風格未だ高からず、宋末江湖一派を出でず。而して時時晩唐に出入し、尚お当時麤獷（粗悪というに近い）の習い無し。一邱一壑、亦た頗る小小の佳致有るなり」という。しかし、鈴木虎雄博士は、各体毎につぶさに観察し、そのかなり見るべき成就のあることを指摘される。「弼の古体詩は頗る鍛錬を経たるものなり」、「五言律は彼が三体詩を操せしことにて知らるる如く固より晩唐姚合、賈島の一派を奉ずる者たり。其の詩品殆ど千篇一律の看なきに非るも精錬の余に出で清幽孤峭の致に富む」、「七律は佳作多く風格亦た一様ならず。呉山仁王寺……等并に中晩唐の佳調を得る者なり」等々（前掲論文）。おもうに「四庫提要」の評は、江湖派一般に対する評価が高くないために、周弼をもその中に埋没させてしまった感があり、虚心にかつ仔細にこれをみるならば、必ずしも一概に軽視し去るべき作家ではないのである。いま「宋詩別裁」（清・姚培謙等編）に収める五律一首を掲げる。

野望

春日晩荒荒　春日　晩に荒荒たり
平沙極渺茫　平沙　渺茫を極む
樓敧三面水　楼は敧つ　三面の水
城臥數條岡　城は臥す　数条の岡
白草吳京甸　白草　呉の京甸
黃葉楚戰場　黄葉　楚の戦場
長江俱不問　長江　俱に問わず
一片瀉斜陽　一片　斜陽を瀉ぐ

また「三体詩」の編集およびその各類に加えた解説よりみれば、彼が詩論において一家の見識を備えていたことが知られる。周知のごとく、宋代以降、欧陽修の「六一詩話」を皮切りとして詩話の著は少なくないが、北宋におけるそれは、おおむね詩に関する逸事を録するか、もしくは個々の作品についての評論であって、詩そのものを体系的に論ずることは殆んどなかった。南宋になってやや体系らしきものを備えつつ詩を論じたものとして、厳羽の「滄浪詩話」があるが、これが「三体詩」と相前後して現れていることは興味深い。「三体詩」もまた、詩法においてそれなりに一の体系をもっているからである。

「三体詩」の撰述の意図は、当時雲のごとく輩出した俗間の詩人たちに対し、作詩の標準を示さんとするものであったと考えられる。たとえば絶句、「実接」の類の解説に「其の法は惟に久しく其の伝を失するのみに非ず、

人亦た能く之を知るもの無し云云」というがごとき、その抱負の程が察せられる。その点、厳羽の「滄浪詩話」と態度に共通性があるが、ただ「滄浪詩話」は盛唐詩を推重し、かつ論じ方が頗る高踏的であるのに対し、「三体詩」は時流の好尚に従って中晩唐の詩を主とし、またその解説の仕方は実際的、通俗的である。詩型を「三体」に限ったというのも、この三つの詩型が当時の俗間の詩人たちに親しみ易いものであったからというのが、第一の理由であろう。これらの詩型は、四句または八句ときまっていて比較的短かいし、また近体詩であるからやや煩瑣な規律があるが、それは逆にいえば、その規律をふまえさえすれば、少なくとも一応詩の形を成し得るという利点でもあり、詩を学ぶ者の第一歩として近づきやすい性質を備えているといえる。とすれば、最も短かい詩型である五言絶句が省かれているのはどういうわけか、ということになるが、これは言外の意趣を特に重んずる詩型であり、それには特別の感覚、才能を必要とし、学んで得られるものではないという考えがあるように思える。また周弼の「端平詩雋」に五絶が甚だ少ないところをみると、個人的な好みもあるかもしれない。更に唐詩といえばまず名前の出てくる李白と杜甫の詩を一首も採らないのは、この書物の特色の一つでもあるが、これもやはり李白、杜甫を軽視したというよりは、むしろこれらの詩人は別格的存在であって、学んでいたるべきものではないという意識があったのではないかと考えられる。

要するに「三体詩」は、いわば当時の詩壇の現実の状態に即しつつ、その向上をはかったものといえよう。そこで、「滄浪詩話」が正当に評価されるのは少しのちになってからであるが、「三体詩」は当時たちまち評判になったようである。「三体詩」が現れてほど遠からぬ時期に著わされた范晞文の「対牀夜語二」（景定三年、一二六六序）にいう「周伯弼　唐人家法を選す……是の編一たび出で、後学を補う無しと為さず。識高く見卓く、時習

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

の為に熏染せられざる者、往往にして此に于て解悟す云云」。後世「四庫提要」も、この書の当時における価値を認め、「乃ち知る弼の此の書を撰する、蓋し以て江湖末派の油腔滑調の弊を救うなり。滄浪詩話と各々一義を明らかにし、均しく所謂る為す有りて之を言う者なり」としている。

四、「三体詩」と「唐詩選」

「唐詩選」が明の李攀竜の撰であるかどうかは古くから疑義があるが、いずれにせよその選録が彼の詩論を基礎としているというのは、ほぼ定説であろう（詳しくは本叢書「唐詩選」上参照）。従ってそのいわゆる「格調」の説にもとづき、「文は秦漢、詩は盛唐」の呼号の示すごとく、採録する詩は、初唐盛唐に偏し、更にその中でも、慷慨の気に富む、あるいは悲壮なしらべに満ちた、調子の高い作品を主とする（鈴木虎雄博士の「支那詩論史」にいう「格調派の詩の長ずる所は、雄渾、悲壮、高華、瀏亮にあり」）。いいかえるとその根底には、振幅のはげしい、たかぶった感情、もしくはつきつめた深刻な感情がある。これに対し周弼の「三体詩」が、南宋末期の詩壇の好尚を反映して、中唐晩唐の詩を主とすることはすでに述べたが、その根底にある感情についていえば、「唐詩選」に比較して、より日常的であり、生活詩的な方向に傾き、淡々たる抒情性を主とする。そして表現の面よりいえば、やや技巧的な、才気を発揮するというタイプのものを多く含む。たとえば、司空曙の「江村の即事」（一四二ページ）の

釣を罷め帰り来って船を繋がず、江村月落ちて正に眠るに堪えたり
縦然一夜風吹き去るとも、只だ蘆花浅水の辺に在らん

などは、日常生活の瑣事を深刻ぶらずにあっさりと写した佳作であろうし、李紳の「西陵に到らんと欲して王行周に寄す」（四六九ページ）の

西陵の沙岸　回流急なり、船底沙に黏して岸を去ること遙かなり
駅吏　遞いに呼んで纜を下すを催し、棹郎　閑かに立って橈を斉えんことを道う
猶お瞻る　伍相　青山の廟、未だ見ず双童の白鶴橋
舟人の次第無きを責めんと欲すれども、自ら知る酒を貪って春潮を過せしを

などは、旅の途次のふとした出来事を、さながら物語るがごとくに描いている。また銭起の「帰雁」（一〇ページ）、陸亀蒙の「自ら遣る」（一五七ページ）、杜牧の「赤壁」（一八九ページ）などは、ほとんどもっぱら著想の警抜さによっているであろうし、杜牧の「江南春」（一四ページ）の「千里鶯啼いて緑紅に映ず」や、「秦淮」（一九一ページ）の「煙は寒水を籠め　月は沙を籠む」などは、「映」の字、「籠」の字の、一字の工みさによって詩がぐっと引きたっている。また句中の対を頻用した韓偓の「尤溪道中」（四四ページ、「水は自ら潺湲　日は自ら斜めなり、尽く雞犬無くして鳴鴉有り云云」）、同種の熟語を対置した鄭谷の「江際」（三六三ページ、「那んぞ堪えん　流落して揺落に逢うに、潸然たる是れ偶然なるを得可けんや」）などは、決して感情が浅薄というのではないけれども、やはり技巧的な匂いが強い。更に李商隠の「錦瑟」（二七九ページ）をはじめとする一群の七律は、やはりその華麗な修辞がまず人目を惹く。

以上列挙したような諸例のごときは、「唐詩選」に欠けている面といえるであろうし、また大ざっぱにいって中晩唐詩の初盛唐に対する相違でもある。もとより初盛唐の詩に、こうした日常性、もしくは技巧的表現が全く

欠けているわけではない。たとえば杜甫の成都郊外、浣花草堂における諸作、例をあげるならば、

老妻畫レ紙爲二棊局一　　老妻は紙に画いて棊局を為り
稚子敲レ針作二釣鉤一　　稚子は針を敲いて釣鉤を作る　（「江村」七律）

などはやはり日常の瑣事を描いた佳句といえようけれども、「唐詩選」では故意にこうした面を閑却しているのである。それは編者の見識を示すものではあるけれども、豊饒な唐詩のあらゆる面を見ようとするときは、やはり一種の偏りがあるという感じは避けられない。一方、内容的には違うが、同様のことが「三体詩」についてもいえるのであって、今日より見れば、この両書は、お互いにその欠けている面を補い合っていると見ることができる。この両者を併せ読むことによって、唐詩に対する知識は一段と豊かなものになり、またそれぞれをより深く理解することができるであろう。

五、「三体詩」の分類、とくに虚実の説について

この書物が、詩の形式によって三部に分れているばかりでなく、更に表現のスタイルによる分類があることはすでに述べたが、その類別のすべてを列挙すると次の通りである。

〔七絶〕実接、虚接、用事、前対、後対、拗体、側体
〔七律〕四実、四虚、前虚後実、前実後虚、結句、詠物
〔五律〕四実、四虚、前虚後実、前実後虚、一意、起句、結句、（詠物）
（二十巻本の系統では五律の詠物を欠く。次の節参照）

右の分類の中核を成すものは、「虚」の句と「実」の句の配置による類別、すなわち絶句における「実接」と「虚接」、律詩における「四実」、「四虚」、「前虚後実」、「前実後虚」の四類であり、その他の類は共通する原理のようなものがなく、個々に特色のあるものを一類として附置したまでで、実際に挙げてある作品の数も少ない。たとえば七絶は一七四首を七類に分けるが、「実接」と「虚接」の二類で一三九首を占め、あとの五類は合わせて三五首でしかない。そこで虚実による分類以外のものについては、個別的にその大要をしるすにとどめる。

まず絶句において、「用事」とは、故事、典故を用いたところに一首の妙処のあるもの、「前対」は四句より成る絶句の、前半二句が対句を成すもの、「後対」は後半二句が対を成すもの、「拗体」は近体詩の声律に合わない破格なもの、「側体」は近体詩が平声（ひょうせい）の韻を用いるのが原則であるのに対し、仄声（そくせい）の韻を用いるもの、やはり破格である。律詩においては、「一意」は絶句の「拗体」に相当し、意趣を主とするために形式の規律を守らない破格の作をいい、「起句」は首聯すなわちはじめ二句の、「結句」は尾聯すなわちおわり二句の表現がきわだっているもの、「詠物」はある具体的な対象、たとえば花とか鳥とかを採り上げて題詠するものをいう。以上詳しくは本文のそれぞれの箇所をみられたい。なお、七律と五律の分類はほぼ並行しているが、ただ五律における「一意」と「起句」とが七律には欠けている。その理由はにわかにははかりがたい。

次に句の虚実による分類を一括して考えてみたい。この「虚」と「実」とについて、周弼自身の言をみるならば、五律、「四実」の解説に、「中四句　皆な景物にして実」といい、「四虚」については「中四句　皆な情思にして虚」といっている。すなわち「景物」を「実」とし、「情思」を「虚」とするのである。これを更に敷衍するならば、外界の客観的、具象的な存在を描くものが「実」であり、感情、思考すなわち作者の胸中を写し出すも

のが「虚」であると考えてよかろう。一語一語について、虚なる語と実なる語があるという説は、故青木正児博士によれば、「文鏡秘府論三」（弘法大師空海の著）にみえるものが最も早いとされる（詩文書画論に於ける虚実の理」、「支那文学思想史」所収）。そこでは唐の釈皎然（「三体詩」中に詩あり）の「詩議」なる書を引いて（この書は今伝わらない）、「双虚実対」という対句の法を示し、次の例を挙げる。

「故人雲雨散じ、空山来往疎なり」

つまり「雲雨」は具象的存在、実体のある語であるから「実」とし、「来往」は実体のない抽象概念であるから「虚」とするのであろう。しかし周弼の説は、これを更に展開し、一句の詠ずるところに「実」があり、「虚」があるというもので、これはほとんど彼の独創にかかるのではないかと考えられる。そして「実」の句、「虚」の句の配置が、一首全体の境地に重要な意味をもつことを考え、これによって唐詩を類別して示したわけである。

絶句についていえば、絶句は起、承、転、結の四句より成るが、短かいこの詩型に変化をもたらし、その境地を無限に拡大するのは、第三句＝転句における転換にある（「実接」の解説に「絶句の法は、大抵第三句を以て主と為す云云」）。そこでこの第三句に「実」の句をおくか、「虚」の句をおくかによって二類に分れる。これが「実接」と「虚接」である。「接」とは、実または虚を以て、前二句を承接する（前をうけてつづける）の意である。この「実」と「虚」とは、一句の詠ずるところを指していうので、文法上でいう「実字」（名詞、数詞）、「虚字」（動詞、形容詞、副詞、前置詞など）の別とは直接に関係はないが、青木博士の指摘されるように（前掲論文）、実際には「実接」の類の第三句は実字をもってはじまるものが多く、「虚接」においては虚字をもってはじまる句が多い。それぞれの類の第一首について見るならば、「実接」第一首「華清宮」の第三句は「朝元閣上　西風急

なり」であり、「虚接」第一首「伏翼の西洞に人を送る」のそれは「慇懃に好し去れ　武陵の客」である。おもうに絶句に限らず、一般的にいって「実」の句は実景の描写であるから必然的に名詞＝実字が多くなり、「虚」の句は主観的な表現であるから形容詞、副詞など虚字が多くなる傾向がある。また周弼が、五律の「前虚後実」の条で「前を軽くし、後を重くす」といっているように、「実」の句は重厚な感じがあり、「虚」の句は軽い感じになる。そこで第三句において、実字を主とする重い句をおくときは、語勢がにわかに改まって「転換力有り」ということになり、これに対して「虚接」の方は「略々転換を加う」といっているように、その転換は柔軟なものになる。これが「実接」と「虚接」の差異の主要な点である。

次に律詩においては、律詩の八句は、二句ずつ一組となって聯を構成し、首聯、頷聯（前聯）、頸聯（後聯）、尾聯の四つの聯が一首を構成する。そして中の二つの聯、頷聯（前聯）と頸聯（後聯）とは必ず対句でなければならず、これが律詩の中核を成す部分である。そこでこの二つの聯の虚実によって分類がなされる。そして中の四句つまり前聯、後聯の対句が二つとも実の場合を「四実」とし、ともに虚の場合を「四虚」、前聯が虚で後聯が実なるものを「前虚後実」、その逆の場合を「前実後虚」という風に四類に分ける。「虚」といい、「実」ということの意義には絶句におけるそれと大差はないのであるが、一句についていうのでなく、二句一組の聯（対句）についていう点が、絶句の場合と異なっており、そこから種々微妙な違いを生ずる。とくに注意すべきことは、律詩において、純粋に情思を写す対句というのは、実際には少ないものだが、景物のごとくみえても、その表現が主観的であれば「虚」とする点であり、またそこが難かしいところだといっている。そのあたりは絶句の場合とかなり違ったニュアンスをもっている。五律「四虚」の条にいう、「虚を以て虚と為さず、実を以て虚と為す

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo